

## 巻 頭 言

平成 18 年度技術専門委員会委員長 伊藤 潔

ガス湯沸器によるガス中毒や大型トラックの脱輪のなど、技術にも関連する事件が続いている。これらの事件には技術以外のものも含め個々の原因があるはずだが、現在の日本における技術のおかれている一般的な問題をもはらんでいるようにも思われる。つまり、技術が高度化し分業化されたために、設計・製作過程のどこかに穴が開くのではないかという問題である。名人芸でものが作られる時代は、全行程を把握した「親方」が設計から製作まで管理した。そのもとで働く「職人」は自分の与えられた仕事をするだけでなく、将来「親方」になるべく、他の「職人」仲間がやっている仕事もすぐそばで学んでいった。この方式は高度成長時代にも形を変えて受け継がれてきたように思われるベテランといわれる技術者は自分の仕事でないところまでよく知っていて、お互いにカバーしあって仕事をしてきた。そのため不払い労働などの問題を生み出した面もある。技術はさらに高度化し、分業が進みベテラン技術者がやめていくようになり、さらに技術者の意識（というより社会全般の仕事に対する意識）も変わって、自分の専門以外の部分を学ぶ余裕がなくなり、仕事の間隙に隙間ができる場合も増えてきたのではないだろうか。実際はこれらの穴を埋め、全体を統括するマネージャーが必要なのだが、そのような体制が整っていない面がある。

防災研の技術室が設立され、将来の研究支援としてどのような技術者が必要になるかということで、個々の専門を身につけて仕事をするとともに、マネージャー的に研究の技術的側面を全体的に支援できる人材が求められ、技術室もそのような体制がとられたものと思われる。しかし、これは体制だけでなく各技術員の努力とともに、研究支援を頼む側にも多大な努力を要するものである。技術員にとっては、専門分野の仕事を身につけるだけでも大変なのに、さらに周辺の技術を学ぶことは、短期的には両立しない場合も多く、時間的にも大変な努力を要する。研究者にとっては、将来自分の分野で役に立つ人材の養成はともかく、どこで働くかわからない技術員の養成は、どれだけのメリットがあるかわからないからでもある。技術員にとっては、専門的な技術とさらに広い分野をカバーできるマネージャー的な能力の両方をどのように身につけていくか、また、技術室はそのためにどのような体制をとるべきか、試行錯誤で進めていくしかないと思われる。

今年度は職場への定期的長期派遣を実施した。より深く専門的な仕事を身につけ、研究支援を効率化するためである。また、ベテラン技術員が数年間で退職してしまうための対策でもある。実際には若い技術員の数は少ないので、研究者側からは満足のいくものではないと思われるが、この中で防災研の長期的支援を必要とする仕事を全所的に理解してもらうとともに、新しい技術の模索がされることが必要である。専門プラスの技術獲得のためには、このような支援の仕事から一歩進んで、必要とされる新しい技術開発を目指すことも大切である。大大特の支援では技術室の発案で携帯端末を用いた地震観測装置の開発が実施された。実現には今一步のところであるが、携わった技術員は、その過程で各種の技術を習得した。このような開発を含む仕事が、今後各職場でなされるものと期待される。従来支援技術の習得はもちろんであるが、開発的な仕事を通して実際面での新しい技術を取得通し、さらに、広い知識や技法を習得するは、技術員にとって非常に重要なもので

ある。若い技術員はかつて熟練技術員が勤務したように 40 年同じ職場で勤務できるかどうかはわからない時代になってきた。また、たとえ同じ職場でも支援内容は急激に変化すると思われる。研究支援のためには、自分で仕事をするだけでなく、仕事を外注できるようにもならなければならない。このためには、実際に請け負って仕事をする人たち以上にしっかりした技術内容の把握が必要である。特に複数の会社等に依頼する場合は、それぞれの仕事の間を埋めるマネージャー的な仕事が重要になる。派遣された複数の職場で、それぞれの職場での支援を超えた技能を習得することが望まれる。

平成 19 年度からは再雇用制度が実施され、引き続きベテラン技術員の支援を受けることができる機会が残される。これまでも研究支援職員として支援を受けてきた場合はあるが、制度的に保証される。この制度を生かして、技術の継承をより確実なものにしていただくよう切にお願いしたい。この延長上になるが、隔地における技術員の役割が重要視されるようになってきている。これは現在実質的に隔地の観測・研究を支えてきた技術員の退職が近づいたこともあるが、防災研究所において、観測・実験の重要性が再認識されてきた面も大きい。防災研究は、防災に関する基礎や一般論を研究すること、政策的な提言をすることも重要である。しかし、それぞれの災害の理解が深まる典型的な地域において、災害の背景や事例を深く研究することによって、これらの研究の素材を提供することが基礎になっていることが再認識されていると思う。直接役に立つ災害軽減とともに、それらの基になっている「自然」の認識が重要だからである。したがって、上記の広い範囲の支援ができる技術員とともに、特殊な仕事を支援する技術員が必要になってくる。今後、採用の問題も含めて隔地における技術員の勤務体制が問題になる。技術員にとって隔地における勤務は種々不便な面もあるが、実務的な技術の習得にとってもまたとない機会である。

今年度は米田格氏が新たに採用され、技術室の一員になった。今後の研鑽と活躍を期待している。また、火山研究センター勤務になっていた福島麻沙代氏が山崎友也氏と交代になった。隔地の支援の体制も実施に移されているので、幅広い技術とマニュアルでは得られない支援のノウハウを身につけてもらいたい。

さらに、今年度は長期にわたり防災研究所の研究支援活動を支えてこられた、平野憲雄室長および和田安男の両氏が定年退職を迎えられる。平野氏は 2 代目室長として、技術室の確立・運営・発展に尽力されるとともに地震予知研究センターのテレメータシステムおよび北陸観測所の運営をも実質的に実施された。平野氏の尽力によって、各種の困難を克服して技術室が発展したことは皆の認めるところである。また、それ以前に勤務された上宝、北陸両観測所および地震予知研究センターでの研究活動の支援とともに、研究支援活動に大きな足跡を残された。和田安男氏は上宝観測所設立以来、一貫して地殻変動計測についての研究活動を支援してこられた。永年のご研鑽とご貢献に対して心から感謝致します。両氏は再雇用によって、これまでとは違った立場で、それぞれ北陸および上宝観測所の支援を中心に、防災研究所の研究活動の支援をされますが、今後ともご協力をよろしくお願い申し上げます。

末筆となりましたが、2 年間、技術専門委員会でお世話になった委員の皆様、多大なご協力をいただいた技術室の皆様、研究・教育委員会の川崎副所長をはじめ委員の皆様、技術専門委員会の活動にご理解をいただいた河田所長を始め防災研究所の皆様にご心より御礼申し上げます。